

「キリストの大使として生きる」

～キリストの愛によって導かれる生き方～

「だから、私たちは今後、世間の評価によって、人を見ることはやめようと思う。以前は、世間の評価でキリストを眺めていたとしても、今はそういう見方はしない。」

コリント人への第二の手紙5章16節 [現代訳]

先週のスリランカでのテロは本当に痛ましい出来事でした。以前にも平和だと思われていたニュージーランドのイスラム寺院での襲撃も惨事でしたが、今回も平和なスリランカでの出来事でした。思想としては真逆のようですが、平和が脅かされる事件としては同様な考え方があったように感じます。私たちはパウロと同様にキリストの大使としての使命が与えられていますが、それは平和の使者としての役割ですから、間違った方向に向かって世界に対して、熱心にとりなし、平和を造り出すことにさらに熱心でありたいと感じました。

私たちは今、コリント第二の手紙を通して、パウロの心を学んでいます。その自分自身に与えられたキリストの愛の心をコリントのクリスチャンたちと分かち合いたいと強く願うパウロの心が伝わってきます。

パウロのメッセージは、自分に与えられたキリストに対する証しということが中心です。だから、何か机上の教えを語るのではなく、パウロ自身に与えられた神様の熱い愛のメッセージをシェアしています。どうしてもなく熱い主の愛が彼自身に迫ってきていて、とどめることができないパウロの心が表現されているように感じます。

しかし、その内容を完全に受け止めていないコリントの教会のクリスチャンたちがいることも感じています。どんなに頑張っても、それが伝わらないということほど淋しいことはありません。朝の連続テレビ小説でも、主人公の「なつ」がおじいさんの心に伝えたいことがあって始めた演劇でしたが、もちろんおじいさんに伝えなかったこともありましたが、それ以上に自分自身を表現するということを学んでいきました。

私たちも誰かに、神様の素晴らしさを伝えていく時に、もちろんその人に知って欲しいと願うことも大切ですが、自分自身に対して神様ご自身がどのように働いてくださったかということを知り、体験していくということが何よりも大切なのだと感じます。

パウロはコリントの人にキリストを伝えていく中で、自分自身に与えられている神様の恵みをもう一度味わい直していったのではないかと思います。

私たちは神の国の大使です。神の国の代表者としてこの地に生かされています。だからこそ、神の国をアピールしなければいけません。その前に、私たち自身が神の国を体験していかなければならないと思います。神様が与えて下さっている恵みをもっと具体的に体験し、感動し、その情熱に満ちあふれたいと願います。